



さまざまな水生植物が生育するお茶の水池の下流にある浅場



市民ボランティアと一緒に浅場作り (2018年のかいぼり)

みどり鮮やか

井の頭池の浅場

井の頭池の浅場は、かいぼりで水を抜いた期間を利用して整備された。こうした浅場は池畔に数ヶ所あり、絶滅危惧種を含む湿生植物や、トンボ、水鳥などが生育・生息する場になっている。

池畔に整備された浅場

井の頭池の池畔は、ほとんどが垂直な護岸によって水域と陸域に分けられ、陸地から池底をなだらかにつなぐ移行帯が少なかった。移行帯の少ない環境は、湿生植物や水生植物が生育しづらく、稚魚や水生昆虫、それを食べる水鳥といったさまざまな生きものの棲みかにもなりづらいことから、2016年に行われたかいぼりをきっかけに、井の頭池に多様な水辺環境を創出する目的で浅場も整備した。浅場を造るために、護岸の構造を大きく変えることは困難なため、護岸はそのまま残し、その沖に杭や板で土留めを設けて浅場にした。

絶滅危惧種も生育

浅場が整備されてからは、整備前に比べ、さまざまな湿生植物が生育するようになった。東京都レッドリストに掲載されているジョウロウスゲ、サジオモダカ等の希少種も確認された。普通に見られるヒメガマ、コガマなども、生育範囲を広げ、その茂みの中ではカイツブリが巣を造った。湿生植物が群生する浅場は、マユタテアカネ、マルタンヤンマなどのトンボ類の産卵や、水鳥の採食場としても利用されている。



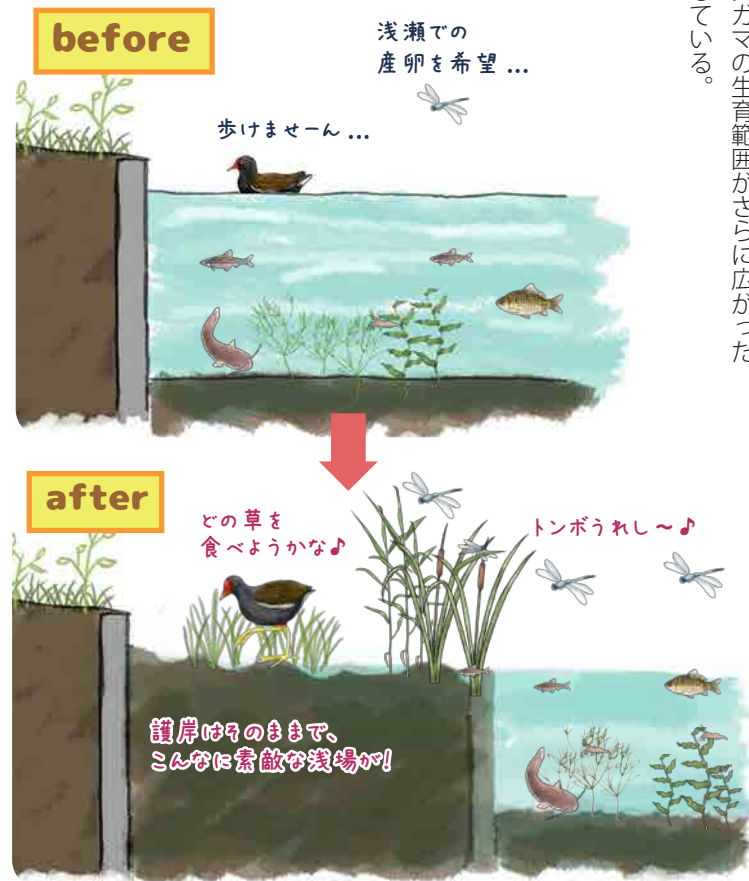
浅場環境を保つボランティア

浅場の環境を良好に保つためには、手入れも欠かせない。植物の地上部が枯れた昨冬に、井の頭かいぼり隊が浅場の再整備や維持作業を行った。

小高い陸地をなだらかに削り、その土を水深が深かった場所に移して湿地を広げた。絶滅危惧種のカンエンガヤツリは、新しくできた裸地にいち早く生え、環境が安定してくると姿を消すが、表土を攪乱することによって生育環境を保つことができる。

浅場の植生にとって、日当たりも極めて重要だ。昨冬は護岸を破損しそうな傾斜木の伐採や枝下ろしが行われ、池畔の日照も改善された。その効果で今夏はこれまで数株だったサジオモダカの群生が見られるようになったり、ヒメガマの生育範囲がさらに広がったりしている。

浅場整備の模式図



かいぼり隊による浅場の再整備作業

スゲの葉そよぐ 夏の水辺

夏の浅場では、カンガレイやスゲの仲間、ミコシガヤの茂みにさまざまなトンボが飛び交う様子を見ることが出来る。ガマの穂も涼しげだ。四季折々に違った表情を見せる浅場の自然を楽しんでほしい。



オオシオカラトンボ



コフキトンボ

いけいけ! かいぼり隊
～池男 & 池女、池を掃除するの巻～

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、井の頭かいぼり隊の活動を休止しています(2020年6月現在)。今号では毎年夏頃に行われているアオミドロ回収作業を紹介いたします。

井の頭池の水面に漂う濃緑色のモワモワした物体…。一般的にアオミドロと呼ばれる糸状藻類の仲間だ。池底を覆うように生え、やがて浮かび上がって岸辺に吹き寄せられる。しだいに黒くならず臭いを放つので、人気がない。漂着量が多いときにはかいぼり隊も吹きだまりを片付ける。

アメリカザリガニ防除のワナ回収が一通り終わると、水面清掃の始まりだ。池に入ってアオミドロを寄せ集め、岸にいる人が網ですくう。水陸の連係プレーでみるみるうちに水面が見えるようになっていくのが気持ちいい。水面清掃は例年、アオミドロの発生が一段落する夏頃まで行われる。



オイカワの群泳

井の頭池では、初夏にオイカワの群れが見られるようになりました。きれいな水を好むオイカワは、年を追うごとに確認数が増えています。今期は300匹以上の群泳が確認されました。朝には水上の昆虫をジャンプして捕らえる姿を見ることがあります。



塊になって浮遊するアオミドロの仲間



すくいとり作業を行うかいぼり隊 (2018年8月)